

(連 載)

『紅旗』 1976年第 6 期の紹介

鄧小平を批判し、右からの巻きかえしの風潮に反撃を加える闘争が偉大な勝利をおさめるさなかにおいて、中国共産党と中国の人民は輝かしいプロレタリア文化大革命の10周年を迎えた。『紅旗』のこの号は巻頭に《人民日報》・《紅旗》雑誌・《解放軍報》編集部「文化大革命永放光芒——紀念中共中央一九六六年五月十六日《通知》十周年」をかかげた。この論文は、10年前の中央の「通知」の精髓として、社会主義の時期において「ブルジョアジーは党内にいる」という、毛主席が提出した科学的論断をとりあげ、これをマルクス・レーニン主義を発展させたものと指摘している。10年来の闘争の経験は、党内の走資派こそが、プロレタリアートに決戦を挑み、資本主義の復活を図るブルジョアジーの主要な部隊であり、その政治的・代表だということを証明した。なぜか。かれらは手に一部の権力をもち、しかもマルクス・レーニン主義の仮面で一部の自覚の低い人びとを欺くことができる。この点は党外のブルジョアジーには思いもよらないところだからである。この論文はさらに進んで、鄧小平が党に対し進攻するに当たっての政治的綱領、世論の上での準備、組織的措置、行動の段取りなどについて系統的な暴露と批判を加えたのち、あらためてプロレタリア文化大革命の偉大な歴史的功績を確認し、これに対する巻き返しは人心を得られず必ず失敗するということを明らかにした。闘争は偉大な勝利をおさめたが、まだ決して終りを告げたのではないことを説きながら、この論文は、特に毛主席が、右からの巻きかえしの風潮に反撃する闘争のなかで発した一連の最新の指示の意義を強調している。

鄧小平を引きつづき批判するなかで、毛主席の重要指示についての学習を深めなければならない。

第1のセクション「学習毛主席重要指示，批判鄧小平修正主義路線」では、程越「加强学习，深入批鄧」は、「ブルジョアジーは党内にいる」という毛主席の指示は、プロレタリア独裁のもとにおける継続革命についてその方向をさらに一步を進めて明かにしたということ、毛主席の一連の最近の指示に基いて、たとえば鄧小平が悔い改めようとしないうる走資派に墮落して行った過程、鄧小平と社会における階級敵、資本主義勢力との関係进行分析・批判すれば社会主義時期における階級闘争の特徴を明らかにすることができること、また鄧小平がブルジョア的権利をいかに強化・拡大し、修正主義の「大官」どもの利益を守ったかを分析・批判すれば、党内のブルジョアジーとブルジョア的権利との関係を明らかにすることができ、さらに鄧小平が「一旦権力を握ったら」、いかに各党内にわたってプロレタリアートに対する反攻を進め、ついには天安門広場の反革命政治事件を引き起こすにいたったかを分析・批判すれば、党内ブルジョアジーの危険性を明らかにすることができることなどを強調している。

方剛「走資派就是党内的資産階級」は、「ブルジョアジーは党内にいる」という問題についてのさらに立ち入った究明である。民主主義革命の時期には、党内の日和見主義分子、日和見主義路線の頭目は、ブルジョアジーの党内における代理人にはちがいないけれども、全体としてのブルジョアジーから見れば、単なる従属物に過ぎない。社会主義革命が進むにつれて、党外のブルジョアジーは、経済的には生産手段を失い、政治・思想路線では敗北を重ね、その勢力は衰える。この階級になってこそ走資派は、「ブルジョアジー全体の核心勢力」として党内に現れて来る。潘鋒「切不

可書生氣十足——學習《關於胡風反革命集團的材料》的序言和按語」は、特に党内の走資派と社会の反革命分子との連繫の問題から、反革命分子の悪らつな戦術と手法の問題を論じている。龍巍「鄧小平是党内最大的分裂主義者」は、鄧小平が党の団結を破壊した罪行を暴露している。

安群「領導要向群眾學習」は、鄧小平批判の闘争のなかで毛主席があらためて強調した「大衆は眞の英雄である」という指示に基づいて、指導者がしばしば普通の勤労者に及ばないのはなぜかという道理を明かにしている。延亮「領導幹部要旗幟鮮明地參加戰鬥」は、正面の闘争のなかで多くの指導的幹部は、一時鄧小平の反革命修正主義路線に欺かれていた人びとを含め、積極的に鄧小平批判に参加しているが、少数の指導的幹部は階級闘争、路線闘争の自覚が低いため十分に積極的でなく、さらにきわめて少数の指導的幹部は、鄧小平の路線の影響のもとで、若干のあやまった言論・行動があったため、利害得失を顧慮して、指導の責任を放棄しているという。この論文はこういう人びとに対して、実際行動であやまりを糾して、大衆の諒解をかちとることを勧めている。長春市縫紡機製造廠党委員会「我們是怎樣联擊實際批鄧的」は、規模の大きくない工場における鄧小平批判の経験の紹介だが、この闘争のなかで生産が猛烈に上昇していることに注意したい。

「鞏固和發展文化大革命的勝利成果」のセクションは、文革10年の成果の総括である。紀岩「牢記文化大革命對自己的教育——駁“一概忘記”論」は、文革前走資派のあやまちをおかした幹部も、大多数はすでに毛主席の革命路線に立ちもどり、党と人民とのための仕事に努めているが、これこそ文革の重要な成果のひとつだと指摘し、この成果をうち固め、發展させなければならないと説いている。康立「絕不能同資產階級講平等」は、特にこの10年来の闘争の歴史は、プロレタリア独裁を打ち固めるか、それともこれをくつがえすかこ

そ、社会主義時期における生死をかけた階級闘争だということを教えていると説く。向紀偉「文化大革命与工業的發展」、趙豐年「社会主義農業迅速發展的十年」は共に短文だが、この10年間の工業、農業の發展概況の要を得た紹介である。中共都安瑤族自治県委員会「在階級闘争中前進」は、広西チウアン族自治区の西北部にあり、7つの民族が雑居している自治県が、文革の成果としてかちとった大変化のあとを紹介している。

最後の「以階級闘争為綱乘勝前進」のセクションは文革がイデオロギー戦線にもたらした成果に捧げられている。燕楓「沿着毛主席的文芸路線繼續前進——學習《在延安文芸座談会上的講話》」は文学・芸術戦線における闘争の回顧であり、中国科学院・吉林省・吉林市联合考察組「群眾辦科研的生動實踐——談吉林隕石雨的考察」は、日本の新聞も賑わせた大隕石雨についての報告である。史衆「學習魯迅對旧教育的批判」は魯迅の旧教育に対する批判が特に深刻なのはそれが孔孟の道に対する批判と結びついていたからと説いている。最後の下郷知識青年佟英茹「堅定不移地走与工農相結合的道路」は、文革当時の紅衛兵組織の指導者が、内モンゴルの農村に根をおろし、以来7年、工場入り、大学入り、指導機関入りの機会を6回にわたって蹴飛ばし、農村で頑張りつづけている心境を語ったきわめて示唆に富む文章である。

(藤井満洲男)

●資料集 No. 1

中国の住民組織と向陽院運動

B 5 42頁 350円

編集・(社)中国研究所婦人研究会